明スポ

先陣切って六大学開幕！
大学スポーツよ、立ち上がれ

real COVID-19連載

東京六大学野球秋季リーグ戦が9月19日に開幕した。5000人の観客に加え、外野席に応援団の入場を認めるなど、コロナ禍の大学スポーツでは異例の規模での開催となった。外に目をやると、いまだ公式戦のめどが立たない競技もある。「未曾有のスポーツを取り巻く環境はどのように変わっているのか。今後から始まる連載、「real（リアル）」で、各部の選手と大学スポーツの今を追う。

あの感動をもう一度。

試合がしたい
応援がしたい
熱狂を伝えたい
この瞬間は
二度とこないから。

明大スポーツ
9月21日 月曜日
令和2年（2020年）
第504号
香うどん丸香
新入生歓迎号
明大スポーツ新聞
創刊 1953年
編集人 中野 拓士
東京都千代田区神田駿河台1の1
〒101-8301 TEL/FAX 03(3233)3703
http://meisupo.net/

読者の皆さまへ

新型コロナウイルスの感染拡大は学生生活にも影を落としました。卒業式と入学式は中止になり、授業もオンラインに。明大スポーツ新聞部は一時、活動を停止し、新入生歓迎号も発行を延期しました。
7月から一部活動を再開することができ、ようやく今号をお届けすることができました。ご協力いただいた皆さまに深く感謝します。明大をより盛り上げる“明スポ”として発信していきます。今後も変わらぬご愛読をお願いいたします。

六大学主務の本音トーク

Meiji 太田主務
――開催発表後の反響は
「多くの0Bの方から電話を頂きました。『球場には行けないけど頑張れよ』という声を頂きました」

WASEDA 豊嶋主務
――例年と異なるリーグ運営でした
「普段とは違う神経を使いました。六大学主務のLINEグループで、感染対策について頻繁に共有していました」

RIKKIO 高橋主務
――感染対策について
「活動再開が6月27日と遅かったですが、10ページにわたる感染マニュアルを作成し、感染予防の徹底に努めました」

HOSEI 福島主務
――開催にあたって苦労したことは
「オープン戦を組むことです。自校のグラウンドでの試合が禁じられていたので、相手や会場探しに苦労しました」

KEIO 福田主務
――チーム運営の面では
「短期決戦に懸ける重さというものを常に念頭に置いていました。難しい側面が多く試行錯誤の日々でした」

TOKYO 玉村主務
――開催が決まった時の心境は
「他のリーグだと春の時点で中止を決定している所が多かったので、感謝の気持ちが大きかったです」

（撮影者：竹川直樹）

◆主な体育会の活動状況に関して◆

部名	開催大会／開催時期	活動再開時期
柔道部	大学生の全国大会全て中止	8月末
競走部	全日本大学対抗選手権／9月	7月上旬
水泳部（水球部門）	日本学生選手権／9月	6月下旬
サッカー部	関東大学リーグ戦／7～9月	6月下旬
ラグビー部	関東大学対抗戦／10月	9月上旬
山岳部	北アルプス登山／8月	7月上旬
卓球部	全日本大学総合選手権中止	8月上旬
バレーボール部	10月までの公式戦中止	8月中旬
自転車部	全日本学生トラック／9月	自主練習を継続
ラクロス部	関東学生特別大会／9～12月	7月上旬

選手、観客、応援団……禍中に響け多くの声

日常
客数で迎えた9回、死一塁、西川遥輝外野手（商4＝履正社）の打球が左翼席を破ると、神宮球場はこの日一番の歓声に包まれた。応援団はラッパを吹き鳴らし、スタンドは拍手を送った。
1―7、西川のタイムリーで二塁に戻いたが、結果は大敗。しかし、誰もが待ち望んだ「リアル」がそこにはあった。
大会が開かれ、声援を受ける。例年ならいつものこと」だ。そんな当たり前の日常が戻ってきたことに、選手たちは「感謝しかない」（青木風馬内野手・商4＝常総学院）と、特別な思いを抱いている。

経路
「部で集まっての活動を原則禁止とする」。緊急事態宣言が出た4月、大学から体育会各部に活動自粛の要請が届いた。硬式野球部では寮生の多数が実家に戻り、残る選手も少人数での練習に限られた。
昨年の同じ時期は、全日本選手権を制覇した歓喜に沸いていた部。それがシートノックすら満足に受けられない。「これからどうなってしまうのか、不安が強かった」。エースの大江竜聖投手（政経4＝作新学院）は、コロナ禍で変わり果てた当時のチームを振り返る。
他競技と大会中止が相次ぐ中、六大学野球連盟は「勇気と元気を与えたい」と、秋季リーグ戦開催へ向けた動きを模索。イベント開催が緩和された8月に疾走での開催を実現した。各校練習だけでも戦うと、小規模の運営だったが、これが秋季の本格開催につながった。「一人では何もできないことを知った」（大江）。多くの協力なに、日常が戻ることはなかった。

時間
幕を迎えた。
だが、他競技ではいまだに公式戦のめど立たない部も多い。バレーボール部もその一つだ。春季リーグ戦も中止が決まり、11月末に予定されている全日本大学男子選手権の開催も危ぶまれる。「それでも出場が確定している大会に向けて開催の可能性が残っている大会に向けてやるしかない」と練習に打ち込む。
19日の六大学秋季リーグ開幕戦、声援が響くなかで、選手たちは声を張り上げた。「学生にしかつくれない、一瞬のドラマを感じた」（あるアン）は試合後、こう話した。
取り組める4年間に、一つでも多く、戦いの場を。残された時間は長くない。

【富野順平・小畑知輝】

新しい応援、の時代

真夏の神宮はにぎやかな歓声が響いた。コロナ対策（伝統の応援が一変したからだ。球場を彩る応援団の姿はなく、声が入っても拍手を送ることしかできない。
例年ずっとの声援リーグ戦を経て、今秋は応援団の入場が認められた。応援団法人スリーフッド（東京）は、「声援が欲しい」プロジェクトを立ち上げ、ウェブサイトで横断幕のまに表示され、エールが文字となって選手たちに届く。
この秋、球場の内外で新しい応援の形を体感する人が増えると、六大学をより大きな盛り上がりを見せてくれるだろう。

【荒川千那】

ホイッスル

雨上がりの散歩道“水たまりのむこうがわ”。
水たまりの前でしゃがみこんだ。幅など飛び越えられるはずなのに、なんだか無視できなかった。不意にのぞいた自分が映る◆7月上旬が映る。◆突然自分の聴力が低下した。まるで水が入ったかのように、強烈な違和感が走った。慌てて耳鼻科に行くと、ストレスが原因の突発性難聴という診断結果。「コロナ禍で“神経質になり過ぎているんじゃないですか”という医者の言葉は的確だった◆日常期間中いつもはスルーできたものの前で立ち止まることが増えた。マスクをしているからか、電車内でのせきに、それに対する厳しい視線。コロナに対する厳しい食い違い。そこから生まれた中傷の声。全てが無視できない存在になって、気付けば立ち止まっていた◆ある日、あとのやいたいと見るようになっていた。SNSという名の水たまりは、人々の悪意で濁り見えないほど深かった。すくい上げてすっと見ていたい意見があった。水に映る自分をもやっとしたくなる意見ばかりだった。しかしそこには確かに人の姿と感情があった。学校に行けない自分の姿も間違いなく映っていた。学校に行きたい、でもコロナはただ怖い、でも行きたい、の風邪とは言いたくない。学校がクラスターフェスなんて許せない、なぜ大学生だけが学校に行けないのか、本当に我慢する必要があるのか。水たまりの中で私はゆらゆらと揺れていた◆何が正解か分からない。立ち止まってどんなに自分を見つめても、いまだにゆらゆらと揺れている。水たまりのなかに映っている、いつの顔を上げ虹を見つめられる日が来るだろうか

第17回明治大学シェイクスピアプロジェクト
『じゃじゃ馬ならし』
2020年11月 無観客上演・無料配信
（MSP公式HPにジャンプします）
#MSPじゃじゃ馬 #MSP今年もやるってよ

ROKUDAIGAKU MESSAGES
声援が欲しい。
メッセージを贈って六大学野球を応援しよう
かつてないほどの声援を
プロ野球、甲子園と並び、日本の野球界を牽引してきた東京六大学野球。そんなリーグ戦が、昨今の情勢により、かつてない困難に直面しています。球場での盛り上がりは制限され、現況は先の見えない不安と戦っています。
東京六大学野球の盛り上がりのそばには、いつも声援がありました。
かつてない困難に直面している今こそ、球児たちにはかつてないほどの声援が必要です。

大学・校友と皆様のかけ橋となります
明治大学外郭事業会社
株式会社 明大サポート
大学生活・卒業後の繋がりを支援する様々な事業
学内福利厚生施設運営
明大グッズ作成・販売
旅行・留学サポート
教習所・資格サポート
明大サポート

年間購読のお申し込みは 080-4083-5789
読み終えた新聞はお持ち帰りください

レイアウト 二科せい